

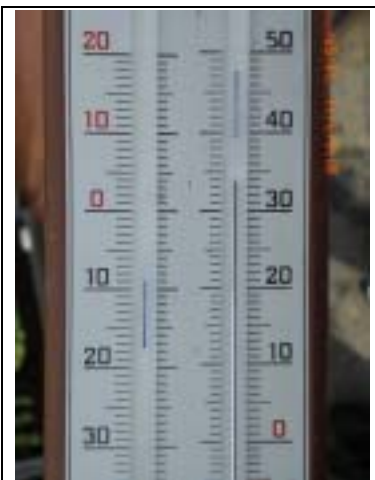
彼岸も近づき、吹く風も温かさを運び、河原のフキノトウも花盛りを過ぎつつあります。この陽気に誘われ、生産者の皆様も畑に精を出す姿があちこちで見受けられるようになりました。

### メロンの発芽

さて、先週までに種子の発芽管理と堆肥のことについて述べましたが、心配していました温度管理の不備による発芽障害などが見受けられております。右の写真はメロンの発芽状況ですが、双葉の完全に展開したのものから発芽始めのものまで、様々な発芽ステージのものが見られています。このような発芽状況となるのは殆どが、温度不足によるものです。メロンは作物の中でも発芽温度は高い方です。適温を維持すれば4日目には発芽してきます。このようにバラつくのは、発芽適温を大きく下回っているからと思われます。温度については一日の最高温度と最低温度の把握が必要で、そのためには、育苗床には必ず最高最低温度計の設置が必須です。左の最高最低



温度計は生産者は違いますが、やはりメロンの発芽床に設置したものです。この方の発芽状況は85%ほどで決して良いとはいえませんが、温度計を見ると最高が39、最低が17となっています。従って、上の生産者の発芽床の温度はもっと低い温度であったと推測できます。でも、この場合は遅れながらもダラダラと発芽してきます。40を越えて種子が煮えてしまうよりはまだましです。煮えてしまうと発芽してこなくなるからです。まだまだ夜間は、コモや古毛布を掛ける、日中の陽射しのあるときは通風採光を図り群れないように管理するようにしてください。



が、やはりメロンの発芽床に設置したものです。この方の発芽状況は85%ほどで決して良いとはいえませんが、温度計を見ると最高が39、最低が17となっています。従って、上の生産者の発芽床の温度はもっと低い温度であったと推測できます。でも、この場合は遅れながらもダラダラと発芽してきます。40を越えて種子が煮えてしまうよりはまだましです。煮えてしまうと発芽してこなくなるからです。まだまだ夜間は、コモや古毛布を掛ける、日中の陽射しのあるときは通風採光を図り群れないように管理するようにしてください。

### ブロッコリーの発芽

右の発芽床は温床線をかなり密に張り巡らしてあるため、発芽はきわめて順調でした。しかし、発芽始めの観察が不十分で、覆いの新聞紙を取り除く作業が遅れてしまい、徒長苗となってしまいました。苗は光を求めて伸びるので、発芽がチラホラ確認されたら、光に当てるように心がけてください。ただし、日中の直射日光を当てることは危険です。播種の床土は黒いため、直射日光を浴びると部分的に高温となり、



種や発芽したての芽が煮えてしまう危険性が高くなるためです。あまり徒長した苗は病害や乾燥に弱く、育苗中に消えてしまい易いものです。すぐに撒きなおして健全な苗を育てるほうが結果的には良くなります。なお、写真の育苗には、種まき培土2種類の比較試験を行いました。播種や育苗用の培土は各社から様々なものが出回っております。培土の材料は土のほか、パーミキュライト、パーライト、鹿沼土、赤土、ピートモスや各種植物由来の腐植、堆肥など様々なものが組み合わされています。培土中の肥料成分は一応の基準がありますので大きな差はないと思いますが、保水力や排水性はかなりの差があるように見受けられます。これにより発芽や生長のスピードはやや差が出るように思います。また、培土をつめる育苗ポットもペーパーポットやセルトレイがあり、それぞれ30 cm×60 cmの育苗箱サイズで通常でも72穴から98穴、128穴まであります。ポットの大きさは水分の保持力に大きく影響しますので、培土とポットの組み合わせについては比較試験をしながらノウハウを蓄積してゆく必要があります。

### 窓口対応の農力アップメモ

#### マルチの機能と使い方、張り方。

##### マルチの種類

透明マルチ・・・春先で地温確保が必要な時に使用。ハウス、トンネル内で良く使われる。

緑マルチ・・・地温確保と雑草抑制の両方の目的を持って使用される。ハウス、トンネル内で良く使われる。

黒マルチ・・・雑草抑制の目的で主に露地栽培で使われる。あまり早く使うと地温が上がらない。

白黒マルチ・・・高温期の地温抑制と雑草防止、苗の焼け防止の目的で露地で使われる事が多い。

シルバーマルチ・・・使用目的は白黒マルチと同様であるが、光の反射を利用してアブラムシの回避効果も期待できる。

##### マルチの張り方

まず縦に強く引っ張り展長する。次に畝の両脇に一人づつ入り、マルチを引っ張りながらシワが残らないよう端を土で押さえてゆく。展長終了したら、畝の上に置き石などをして風によるマルチの浮き上がりを防止する。出来るだけマルチにシワを残さないように注意してください。苗の植え付け後にマルチが剥がれますと苗が痛んだり、抜けたりし生育が停滞する原因となります。

##### 耕種的防除

前出の接木栽培も耕種的防除の技法ですが、生産環境を良くして作物が健全に育つ環境づくりや、過剰な施肥を避けることも大切な事です。また、連作などに発生が懸念されるネコブ病やイオウ病、べと病などに抵抗性を持っている品種などの利用も有効です。トマト、メロン、キュウリなどは品質の追求の結果、ハウス栽培を前提とした品種育成がなされていますので、雨よけ栽培をすることが重要なポイントとなります。